

言語の恣意性とプロトタイプ命題の関連について

A Study on Linkage of Linguistic Arbitrariness and
Prototypical Proposition

田林 洋一

Yoichi TABAYASHI

1. はじめに

本稿では言語の恣意性及び有契性に関する諸議論を取り上げ、新たな説明を与えることを目的とする。まず、ソシュール以降議論されてきた言語の恣意性を、伝統文法における「語」レベルのみでなく、語を包括したより上位レベルの「命題」から考察する。次に、先行研究で挙げる中右(1994)の階層意味論及び Horn(1989)の語用論的分業の問題点と修正点を指摘し、恣意性と絡めて論ずる。

1.1. ソシュールの恣意性とその歴史的位置付け

ソシュールの「言語は恣意的である」という主張は、要約すると「言語における音と意味の結びつきには必然的なものはない」とする立場で、後に Hjelmslev (1953) はその理論を踏襲し、構造主義と内在論、そして共時的言語についての発展的な省察を加えている¹⁾。それに対し、Benveniste (1966) はソシュールに批判的な立場から議論を展開させているが、専ら有契性を念頭に置いた考察であり、現代言語学における統語的視野を考慮していない。

ソシュール以前の言語学は、デカルトやポール・ロワイヤル論理学を経た言語名称目録論が主流とされ、言語は現実の不連続体をなす事象を個々に命名するものと規定されてきた。しかし、

Berlin and Kay (1969) の色彩語の研究からも明らかなように、現実の事象は連続体であり、言語がそれを不連続体として恣意的に「切り取る」作業を担うとする考え方が導入され、当時の言語学の価値観を根底から覆した。そしてソシュールは、現実の事象を切り取るばかりでなく抽象化された概念も具現化し、恣意的に理解させうるのが言語である、と主張した。こうした世界の分節によって生まれた記号表現は、現実世界に一切自然的基盤を持たないために肯定的価値を見出せず、隣接する諸記号との差異によって否定的にしか規定できない²⁾。

言語の恣意性は、同一言語の話し手の間にコンセンサスがあることが前提である³⁾。恣意性とは、話す主体の自由選択という意味ではなく、言語集団の中で暫定的に合意された決定である。そうして決定された恣意的な言語表現は社会的なラングとして自然言語の中に具現化され、個人的なパロールの影響を直接には受けない。だが、パロールがラングに変化をもたらす因子であることから、両者は自然言語の恣意性を決定付ける際に相互補完的な役割を果たしている。

1. 2. 言語の有契性に関する歴史的 위치づけと分類

有契性とは動機付けられた (Motivated) 音と意味の結びつきを指し、恣意性と対立する要素である。Ullmann (1962) は、有契性を「音的な有契性」、「形態的な有契性」、「意味的な有契性」の三つに分けて詳しく論じている。

「音的な有契性」とは、いわゆるオノマトペである。オノマトペは言語ごとに体系化される語構造こそ異なるものの、現実の音声できるだけ忠実に言語体系に存在する音素に当てはめようと試みた言語表現のため、そこに有契性が認められる。

オノマトペの一つに分類される擬声語は音的な有契性の代表的な言語表現である。語源的に音的な有契性を持つ語は、①語彙化

されて他の語と同じ統語的振る舞いを見せることがあり、②個別言語間で似た形態を持つが、そのプロトタイプは異なる、という特徴を持つ。例えば、英語の犬の鳴き声を表現する bow-wow は、以下のように名詞化ないしは動詞化され、それぞれの範疇と同じ統語的・形態的影響を受けることがある。

(1) a. I like the bow-wows.

b. The doggie bow-wows.

(1a) では bow-wow が名詞化しているため、複数を表す形態素 s をつけることができる。(1b) では bow-wow が動詞化し、主語に従って適切に活用される⁴⁾。また、ドイツ語の犬の鳴き声を表す擬態語 wauwau も英語と同様に定冠詞をつけることで名詞句として振舞うことができる (der Wauwau)。英語以外でもポルトガル語 (au-au)、フランス語 (ouah)、スペイン語 (guau-guau)、イタリア語 (bau) などと比較すると、u と a の連続など音韻的・形態的に類似性が見られる⁵⁾。

更に、Sapir (1921) や Jakobson (1976) が研究対象とした、音象徴 (Sound Symbolism) も「音的な有契性」に含まれる。例えば、slip、slide、slither、slush などの語に見られるように、英語の /sl/ という音結合は〈ぬるぬるした〉という意味を持つとする考え方である。但し、音象徴では全ての /sl/ の組み合わせを持つ語が全て (ないしはほとんど) 〈ぬるぬるした〉という意義素を持たねば成立しないという点で、オノマトペよりも言語の有契性の根拠としては説得力に欠ける。言い換えるなら、/sl/ を関数として持ちながら〈ぬるぬるした〉という意義素を持たない語 (e.g. slub) が、何故その意義素を持たないか、音的な有契性だけでは説明がつかない。

「形態的な有契性」は派生語、複合語などに見られる。ある語ないしはある形態素を組み合わせで作られた語は、時に恣意性の度合いが下がる。ある語の音と意味、例えば /book/ と〈本〉、

/case/ と〈ケース〉はそれぞれ恣意的に結び付けられている。しかし、恣意的にある意味を付与された音同士（ここでは book 及び case）の結合である複合語 /bookcase/ は、〈本をしまうケース〉として、極めて高い有契性を持つ。

派生語の例として typewriter を扱う (Culler, 1976)。type と writer の関係は複合的であるが、write に派生辞 -er を付与することによって、二次的有契性に基づいた意味が付与される（但し、ソシュールは二次的有契性については言及していない）。定延（2000）は、「日本ルーマニア関係」を例に挙げ、音と意味の恣意性は必ずしも合致しないことを強調し、言語の記号的恣意性に反論している⁶⁾。

「日本ルーマニア関係」及び typewriter に見られる恣意性の減少は、ソシュールの時期には統語的分析が考慮されなかったことにある。それぞれの意義素は必然的に形態的・統語的な因子を持ち（日本ルーマニア関係では「日本はルーマニアと関係している」、typewriter では「write something with a machine」）、統語的な繋がりはその構造上、原理的に有契的である。二次的有契性と統語構造は密接な関係を持つが、両者は区別される必要がある。つまり、ある語の二次的有契性及び複合語に関する恣意性の分析は、恣意性と有契性の関係か、統語的に派生された関係かによって異なる。

「意味的な有契性」とは、ある語が示す機能的意味が他の語の意味と何らかの関連性があるケースである。例えば、「あし」という語は、〈机の脚〉と〈人間の足〉という意味特性を同時に持つ。但し、この場合には常に意味の内的関係が問題となっており、元の語それ自体は有契性を持たない文法範疇が想定される。Ullmann はこの問題を多義性と絡め、ある語の意味から別の意味の派生には、その特性上有契性が存在すると主張する⁷⁾。

以上の議論の他に、「文体的な有契性」も有契性の一つの柱である。最も顕著な例が漢字の表意文字であり、「山」、「川」、「木」

など、挙げられるサンプルは多い。

1. 3. 意味の有標性についての若干の考察

有標性 (Markedness) はもともとプラグ学派の音韻論研究から生まれた概念であるが、現在では統語的・意味的な領域にも応用されている。統語的な有標 (Marked) とは、ある文法機能が特定の標識で表される場合であり、標識がない場合は統語的に無標 (Unmarked) とされる。

- (2) a. 私はりんごを食べます。
b. 私はりんごを食べません。

- (3) a. I eat an apple.
b. I don't eat an apple.

- (4) a. Como una manzana.
b. No como una manzana.

(2a)～(4a)は肯定を表す標識が必要なく、統語的に無標である。一方、(2b)～(4b)は否定の意味を持つため、それぞれ否定を表す標識「ない」、「don't」、「no」が必要となる。従って、日本語、英語、スペイン語の各言語では「否定は統語的に有標」である。一方、各言語によっては標識を必要とする言語表現 (統語的有標) とそうでないもの (統語的無標) がある。

- (5) a. 私は彼女が美しいとは思わない。
b. 鳥になれたらなあ!

- (6) a. I don't think that she is beautiful.
b. I wish I were a bird.

- (7) a. No creo que ella sea guapa.
b. ¡Ojalá que sea pajarol!

不確実さなどを表す接続法は、(5a)～(7a)が示すように日本語及び英語では無標だが、スペイン語では有標である。しかし、非現実を表す接続法は(5b)～(7b)が示すように日本語では

無標だが、英語及びスペイン語では有標となる。従って、ある特定の文法範疇のみが統語的有標性を決定する因子ではなく、その機能も同時に考慮する必要がある。

一方、意味的有標性 (Semantic Markedness) は統語的有標性とは原理的に関係がなく、指示的意味を表すデノテーション (Denotation) 以外に付加される補助的・心理的意味を表すコノテーション (Connotation) を指す (後述する Horn の諸研究の欠陥は、統語的有標性と意味的有標性を混同したことに起因する)。

意味の概念的・論理的構造を説明するには、文彩としてのメタファー・メトニミー・誇張法・アイロニーなどの効果の他、思想的・社会的な意思その他のコノテーションの効果や一時的かつ個人的な偶発的事象がもたらす効果を考えることが必要である。コノテーションは文体の文彩も同時に指し、文法の文彩 (つまり統語的有標性) とは区別される (Jakobson (1976) は、詩学と言語学を交えて言葉の文彩を「文体の文彩」と「文法の文彩」に区分けしている)。前者の文彩をある語の有標表現とみなし、簡潔に説明した例として、千野 (1980) が挙げられる。千野は、「意味の有標性」や「文彩」の代わりに「アクトゥアリザツェ」、対極にある記号性を高める意味要素を「アウトマチザツェ」というプラグ学派の用語で説明しているが、これは本節で述べる「コノテーション」と「デノテーション」にほぼ対応する。本稿ではこの二つはある種の境界線は認められるものの、厳密には分割されえないと仮定する。更に、有標性は二項対立ではなく、程度問題であることも同時に指摘する。

文法範疇の視点から考察すると、「意味の有標性」は名詞や動詞など、開かれた文法範疇である自立語において非常に高く、一方、冠詞や前置詞などのいわゆる閉じられた機能語においては非常に低い。しかし、機能語における意味の有標性を自立語以上に突き詰めている研究も、試行段階ではあるが存在する (例えば

Stein, 1976)。なお、「意味の有標性」の程度を決める因子として、先に挙げた語単位の意味構造のみでなく、統語構造も二つの点で大きな影響を与える。一つは統語構造自体に欠陥がなくとも、ラングにおける文の意味構造を構築する選択規則が逸脱していることから生じる「意味の有標性」であり、もう一つは文法的に非文であるが故に生じる「意味の有標性」である。

選択規則の逸脱については Chomsky (1986) などでも論じられているが、Chomsky は「容認可能性」の議論のみに留め、規範から逸脱した意味分析には注意を払っていない。

(8) Colorless green ideas sleep furiously.

Chomsky は (8) を「容認不可能」、規範的言語使用からの逸脱により生じる意味については「周辺の」とみなし、研究の対象から外している⁸⁾。

意味の有標性は、メタファーやメトニミーと同様に一般化すると程度が低くなる。従って、ある程度文彩が使われ一般化した言語表現は、もはや文彩としての価値をなくす。例えば「希望の光」という言語表現は、現れた瞬間は強烈な文彩があった（すなわち意味の有標性が高かった）が、現在では強烈なインパクトを持たず、むしろ語彙化ないしは死喩 (Dead Metaphor) 化されている。

2. 先行研究

ここでは Horn (1989)、中右 (1994) を先行研究と位置づけ、問題点を指摘しつつ、Rosch (1975) 及び Lakoff (1987) に代表されるプロトタイプ論との融合を試みる。

2.1. 語用論的分業 (the Division of Pragmatic Labor) の概略

本節では、Horn (1989) の提唱する語用論的分業 (the Division of Pragmatic Labor) を概観する。Horn の定式化は

Grice (1975) の協調の原理を基盤にした精緻なものではあるが、主観的かつ曖昧な定義が基盤になっているために諸々の問題点がある。自然言語のパロールには如何なるスペシメンも存在し得ないが、Horn はそこに一定の法則を定めた点で意欲的ではあるものの、自然言語を的確に反映した理論とは言えない。

Horn が興味を向けてきた研究対象は、自然言語における論理要素の意味特性である。その研究は一貫して論理学・意味論・語用論的機能を分析するものであり、生成文法における統語的・意味的分析を扱ったものは少ない。

自然言語によって伝達される意味内容は、①各構成要素の意味、②その構成要素を元に決定される字義通りの意味、③各構成要素から摘出される言外の意味ないしは含意、の三つに大別される。20 世紀初頭の意味論は要素主義に根ざした構成性の原理 (Principle of Compositionality) により、事実上全ての自然言語の意味は上記の①及び②により算定されてきた (本格的な含意の研究は、Grice を待たねばならない)⁹⁾。Horn は Grice の協調の原理を見据えた上で、質の公準は保持し、他の公準から二つの相反する原理を構築した。即ち、聞き手指向で上限規定の含意 (Upper-Bounding) が得られる Q-原理 (Q-Principle) と話し手指向で下限規定の含意 (Lower-Bounding) が得られる R-原理 (R-Principle) である。なお、Q と R という記号はそれぞれ量 (Quantity) と関係 (Relation) の概念を含む故の呼称である。

この二つの原理のうち、Q-原理だけを用いると、情報量さえ多ければ関連性を無視して (恐らく永遠に) 発話が繰り返され、R-原理だけを用いると、話者の発声がなされないという事態になる。そこで、Horn は Q / R-原理の適用を相互に規制し合うための上位の原則として、語用論的分業 (the Division of Pragmatic Labor) を提案した。これは以下のように定式化される。

- (9) ある二つの命題が同じ言語表現（同延）を持つ時、
- 〈1〉 より語彙化された一般的な表現は R- 原理に基づく含意によって無標の典型的な意味内容が与えられる (E-expression)。
 - 〈2〉 より複雑、冗長で語彙化されていない表現は Q- 原理に基づく含意によって、無標の形式では伝達されえない有標の意味内容が与えられる (É-expression)。
 - 〈3〉 解釈の優先順位は、E-expression、É-expression の順である。

2. 2. 中右 (1994) の階層意味論 (Hierarchical Semantics) の概略

中右 (1994) の階層意味論モデルにおいて特徴的なのは、①モダリティを談話モダリティ (D-MOD) と文内モダリティ (S-MOD) の二つに分けて命題内容との差異を明らかにしたこと¹⁰⁾、②命題内容の最も高次の位置に極性を置いて中立命題と同列にしたこと、の二点にある¹¹⁾。

(10) Frankly I believe I have told a lie.

(10) の Frankly は発話行為への限定的な主観的態度、即ち命題内容への留保条件であり、D-MOD と解釈される。一方、I believe は話者の主観を示したものであるが、信じるという行為は現実に行われた事象であり、命題内容における客観的態度 (即ち真理値についての査定) を意味し、S-MOD (命題態度) と規定される。

この客観的なモダリティ表現はその役割が曖昧になることがある。即ち、ある対象ないし表現方法が一見客体と解釈されても、それが話し手の意識と融合すると主体と解釈される場合がある。(11) は副詞 Frankly が文頭にあることで I believe が客体と考えられるが、以下では主体と客体の区別が曖昧 (即ち多義的) になる。

(11) I believe I have told a lie.

(11) の I believe は発話時点における話者の心的態度なのか、それとも既に断言されている話者の命題的態度なのかについての情報は無い。従って、(10) とは異なり、D-MOD と S-MOD の二つの解釈が存在することになる¹²⁾。

英語やスペイン語には D-MOD と S-MOD を見極める指標は文法体系には存在しないが、日本語は「テイル」表現がその指標となる。

(12) a. I think that Tom is a spy.

b. Creo que Tom es espia.

(13) a. わたしは トムが スパイだと 思う。

b. わたしは トムが スパイだと 思っている。

階層意味論の説明では (12) は曖昧である。即ち (12) の think 及び creo には二通りの解釈があり、聞き手は (12) が (13a) と (13b) のどちらの解釈を取るかは状況から判断するしか方法がない。一方、(13) には曖昧性がなく、(13a) の「思う」が瞬間的現在時の思考作用を指し示しているのに対し、(13b) の「思っている」は持続的現在時の思考作用を指し示している。英語とスペイン語では副詞 *always* / *siempre* を付加することによってこの違いを表すことができる。

(14) a. I *always* think that Tom is a spy.

b. *Siempre* creo que Tom es espia.

(15) わたしは つねづね / いつも トムを スパイだと思っ
ている。

(14) の think / creo は副詞 *always* / *siempre* の存在により、(15) のように持続的現在時の思考作用しか指し示しえない。従って (14) は有標的な表現であり、明示的ないしは暗示的なコンテキストによる意味の限定、Horn の言葉を借りるならば、Q-原理に基づいた解釈と規定される。意味的には、話者の思考作用が持

続的現在時を指し示しているという事象は客観的、即ち「思っている」ことは現実に関起こった事実と解釈されるため、命題内容成分 (S-MOD) と分析される¹³⁾。

3. 本論

3. 1. 先行研究の問題点と融合

Horn (1989) の問題点は、一つはそれぞれの場面により R- 原理と Q- 原理がアドホックに適用されて有標性の逆転が生じたこと、もう一つは有標と無標の区別が曖昧なまま、両者を二項対立にしたことである。本稿では、中右 (1994) の中立命題を言語表現のプロトタイプ命題と位置づけ、プロトタイプ命題を R- 原理によって生じた無標の命題と仮定する。更に、各命題は中右とは異なり階層構造を持たず、中心であるプロトタイプ命題から逸脱していくことにより意味構造を作り上げていくとする仮説を採用する。この試みは既に Tabayashi (2003) が取り上げたものであり、本稿ではそれに幾つかの修正を加えて命題から語単位に拡張する。

有標性の逆転を表すのが (16a) 及び (16b) である。以下、Tabayashi が提案したプロトタイプ命題を用いて分析する。

(16) a. Black Bart killed the sheriff.

b. Black Bart caused the sheriff to die.

Horn (1984)

(16a) と (16b) は、表現こそ異なるが、命題の真理値は同一である。この場合のプロトタイプ命題の意味構造は (17) である。

(17) [ϕ] [POL [ϕ [BLACK BART KILL SHERIFF]]]

本稿では先行研究に従い、POL は極性 (Polarity)、POS は肯定 (Positive)、NEG は否定 (Negative) をそれぞれ表す。(17) は「保安官は死亡し、その原因はブラック・バートである」という意味のプロトタイプ命題である。(16) の話者は過去時制を用

いて「過去」の出来事に話を限定したという点で、現在や未来を排除した、より限定された意味が生じる。この限定が即ち意味の有標性の程度に影響する。つまり、(17) から一步進んだ意味を持ち、そのプロトタイプ命題から一段階逸脱して以下のような意味構造を生成する。

(18) [IT WAS THE CASE] [POL [ϕ [BLACK BART
KILL SHERIFF]]]

(16) は肯定文のため、それ以外の極性（否定）を排除し更にプロトタイプ命題から派生される。重要なことは、元来の「肯定＝無標」、「否定＝有標」という対立を取り去り、両者ともプロトタイプ命題から派生されたという点では同等の有標性を持つということである。つまり、極性の種類によって有標性の程度は変化せず、一定である。

(19) [IT WAS THE CASE] [POS [ϕ [BLACK BART
KILL SHERIFF]]]

(19) は極性を加えたことにより、(18) から更に一段落逸脱したより有標的な意味を持つ。ブラック・バートが能動的かつ自主的に何らかの行動を加えた結果保安官が死亡したならば、(19) から更に放射状カテゴリー命題に派生する必要はない。しかし、「ブラック・バートが保安官の心臓が悪いという情報を握っていて、心臓発作を狙うために保安官の嫌いな甲殻類のフィギュアを枕元に忍ばせるというような何らかの受動的、偶発的行動を起こしていた場合 (Horn, 1984: 401-402)」、発話者は (16b) のように発言することが予想される。すると、(16b) の意味構造は、(16a) の意味構造 (= (19)) から (20) のように派生される。

(20) [IT WAS THE CASE] [POS [ϕ [BLACK BART
CAUSE SHERIFF TO DIE]]]

(16b) の意味構造である (20) は、(16a) のそれよりも一段階派生を加えている回数が多い。従って、よりプロトタイプ命題

から逸脱した発話として認識され、有標性の程度は(16a)より高い。同時に、(16b)の語用論的容認性は特殊なケースを考慮に入れているため(16a)より低い。この連想は無秩序に行われるものではなく、命題の真理値を変えない範囲でしか行われない。

プロトタイプ命題で顕著な点は、第一に命題のプロトタイプはその時の発話状況で刻々と変化し、一定ではないことである。即ち、発話された瞬間の状況に応じてその命題のプロトタイプが決定される¹⁴⁾。従って、(16)が発話された際、その話者が、ブラック・バートは直接保安官に手を出さずに間接的かつ偶発的な殺害方法を企てたと認識していれば、(16)のプロトタイプ命題は瞬間的に(21)になる。

(21) [ϕ] [POL [ϕ [BLACK BART CAUSE SHERIFF
TO DIE]]]

(21)から派生して到達する最終的な意味構造は(20)であるが、そのプロセスは(19)からの派生よりも一段階少ないため、(16b)は(16a)よりも有標性が低いと認識される。Hornが述べる有標性の逆転は、まずは無標ありきという姿勢から生まれたものである。

プロトタイプ命題には状況に応じて + a となる瞬間的なコンテキスト依存の意味が付与される。

(22) Frankly speaking, I don't think that he is a nice person.

コンテキストを考慮に入れずに(22)を分析した場合、以下のように意味構造が生成される。(23)は(22)のプロトタイプ命題(極性やモダリティ、時制等を考慮していない意味構造)である。

(23) [ϕ] [POL [ϕ [HE BE A NICE PERSON]]]

↓

〈1〉 [IT IS THE CASE] [POL [ϕ [HE BE A NICE
PERSON]]]

↓

〈2〉 [IT IS THE CASE] [POS [ϕ [HE BE A NICE PERSON]]]

↓

〈3〉 [POL [I THINK]] [IT IS THE CASE] [POS [ϕ [HE BE A NICE PERSON]]]

↓

〈4〉 [NEG [I THINK]] [IT IS THE CASE] [POS [ϕ [HE BE A NICE PERSON]]]

↓

〈5〉 [FRANKLY SPEAKING] [NEG [I THINK]] [IT IS THE CASE] [POS [ϕ [HE BE A NICE PERSON]]]

しかし、「率直に話すのが当たり前である」というコンテキスト + α が既に前提的に組み込まれている場合、(22) のプロトタイプ命題は (23) ではなく (24) になる ((24) は D-MOD が + α として組み込まれているという点で (23) と異なる)。

(24) [ϕ] [POL [+FRANKLY SPEAKING [HE BE A NICE PERSON]]]

(24) から以下の派生を経て (22) の意味構造が作られるが、コンテキストの + α を考慮に入れない (22) の意味構造 (= (23) の 〈5〉) とは異なる。

〈1〉 [ϕ] [POL [+FRANKLY SPEAKING [HE BE A NICE PERSON]]] (= (24))

↓

〈2〉 [IT IS THE CASE] [POL [+FRANKLY SPEAKING [HE BE A NICE PERSON]]]

↓

〈3〉 [IT IS THE CASE] [POS [+FRANKLY SPEAKING [HE BE A NICE PERSON]]]

↓

〈4〉 [POL [I THINK]] [IT IS THE CASE] [POS
[+FRANKLY SPEAKING [HE BE A NICE
PERSON]]]



〈5〉 [NEG [I THINK]] [IT IS THE CASE] [POS
[+FRANKLY SPEAKING [HE BE A NICE
PERSON]]]

この意味構造の違いにより、同じ発話がされたにもかかわらず、状況次第で意味が異なってくることが観察できる。しかし、(24)から派生された意味構造〈5〉は、(25)のような表層構造を持たない。

(25) *Not frankly speaking I think he is a nice person.

(25) の frankly speaking はコンテキストに依存された + a から出現したものである。従って「コンテキスト依存の + a は、それ自体意味的にはいかなる影響も受けず、自律的である」という定理を設ける必要がある。

本節の議論をまとめると、以下のようなになる。

- ① ある命題は中立命題を持ち、放射状カテゴリーによって派生され意味構造を生成する。
 - ② 放射状カテゴリーの要素はコンテキスト及び連想による。
 - ③ 言語表現における連想は、その命題内容の真理値を変えない範囲で行われる。
 - ④ コンテキスト依存の + a は意味的にいかなる影響も受けず、自律的である。
 - ⑤ プロトタイプ命題は瞬間的であり、場の状況に応じて変化する。
 - ⑥ 有標性は程度問題であり、どれだけプロトタイプ命題から離れたかに起因する。
- ⑥の「程度問題」とは、ある命題に対して特定のレベルで有標

の段階性が生じるという意味ではなく、有標性は極性などの文法規則も巻き込んだ連続体であるとみなすことである。

3.2. 瞬間プロトタイプ命題論の語への拡張

本節では、命題に対するアルゴリズムを語に拡張する¹⁵⁾。なお、本節では「語の意味構造の内部は命題的な側面を持つ」という観点を採用しているため、語に対しても命題という概念を用いる。語でコノテーションを付与されやすいのは自立語、特に名詞句であり、前置詞句といった機能語にはそれ自体の心理的なコノテーションは含まれづらい。

例えば、「社会主義者」という語のプロトタイプ命題は〈社会主義者〉である。このプロトタイプ命題には「色々な政治活動にも参加し、社会主義者であると述べるのが周囲にとって当たり前¹⁶⁾の出来事である」というコンテキスト内で発せられた場合は、派生する付加的意味も少なく「社会主義者」自体の意味的有標性は低い。しかし、例えば資本主義者ばかりの集会における場面や政治活動とは無縁、ないしは社会主義者が入り込むことのない環境におけるコンテキストでは社会主義者に対して否定的な意味（コンテキスト + α ）が付与される。(26) は、「社会主義者が想定されていない場面での『社会主義者』のプロトタイプ命題」である。

(26) [+NEG [SOCIALIST]]

↓

[NEG [+NEG [SOCIALIST]]]

仮に「社会主義者」という語がこのコンテキストで発せられたならば、聞き手は「社会主義者が想定されていないこのコンテキストで、何故社会主義者のことが話題に上るのか」という違和感を持つであろう。その上で話者ないしは聞き手が社会主義者のことを論じる場合、「社会主義者が想定されていない、ということ

はない」という二重否定の形態を取ることににより、ようやく「社会主義者」という語が認知される。従って、語の派生は(26)が示すように一段階高くなり、結果として意味の有標性が増す。但し、コンテキストによっては二重否定も無標とされる場合もあり、二重否定だからといって必ずしも有標性が高いということにはならない。

以上のように構築されたプロトタイプ命題に、更に派生段階でコノテーションが付随する。即ち、社会主義者が想定されていないコンテキストでの「社会主義者」という語に対して否定的な感情、例えば急進的である、といった感情を持っていた場合、以下のように「社会主義者」の意味構造が生成される。

(27) [ϕ [+NEG [SOICIALIST]]] (= (26))

↓

[ϕ [NEG [+NEG [SOCIALIST]]]]

↓

[RADICAL [NEG [+NEG [SOCIALIST]]]]

上記で付与された[RADICAL]は、あくまで限定的ないしは個人的(Idiosyncratic)コノテーションであるが、社会的に共通されうる。例えば、「毛虫」という語に接した時、大抵の人が「気味が悪い」「気持ちが悪い」といった否定的なコノテーションを同時に持つ。これが話者全体の完全な共通認識になった際に、コノテーションはその価値、即ち文彩としての価値を失い、デノテーションとなる(換言するならば、個人的パロールから社会的ラングへと変化する)。しかしながら、こうしたコノテーションは数限りなく例外があるため、容易にデノテーションとはなりえない。語の歴史的な意味変化が急速でないのもこの理由による。

付加される意味は個人の連想によるところが大きいいため、語の意味構造は発話者ないしは聞き手の印象ごとにそれぞれのコノテーションが異なり、一様ではない。しかし、ある語に対して話

者が独自の意義素を意味構造の中に付随してはならない、という制約はない。但し、ある命題の連想による派生があまりにも主観的・個人的かつ有標的でありすぎると、意味が付与された語は社会的に認知されえず、容認不可能ないしは意味不明となる。

3.3. 瞬間命題における恣意性と有契性

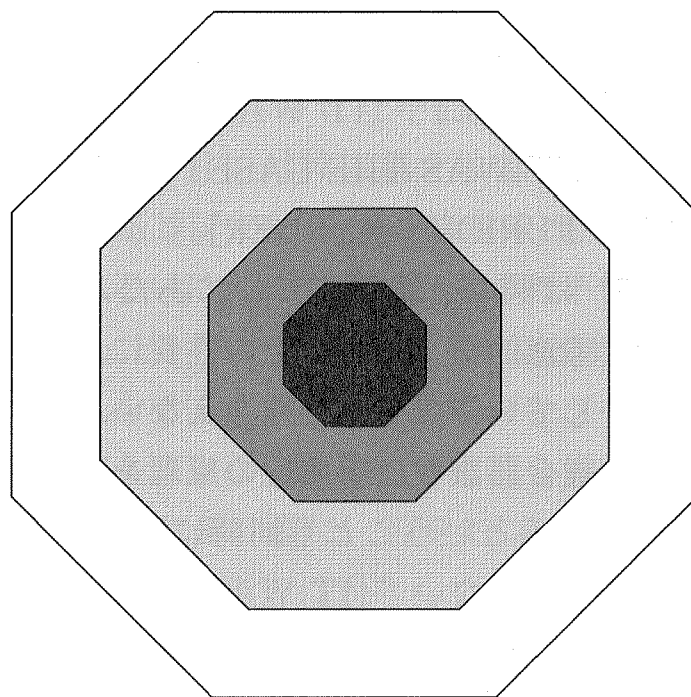
今までの議論から、プロトタイプ命題の中でも更に限られた、いわゆる辞書的な意味の一部のみが恣意的であり、他は全て有契的であるとみなすことができる。しかし、だからといって言語は恣意的でない結論づけるのではなく、場面あるいはコンテキストごとに任意の語の有契性も恣意的に変化する。このコンテキストは、本稿では広義の統語的特徴も包含する。

例えば、辞書的な意味での「社会」と〈社会〉の結びつきは、完全に恣意的であり、この恣意性は個別言語内でも揺らぐことはない。日本語母語者が英語を勉強する際に辞書を引き、「社会」と society の意味的対応関係（意味的同一性）を知ったならば、日本語母語者はその関連にいかなる動機付けも見出せず、ただ「社会」と society の結びつきを理屈抜きで暗記する他に方法はない。しかし、日本語の〈社会〉と英語の〈society〉はその有契的意味（ないしはコノテーション）において必ずしも同一ではない¹⁶⁾。更に、語によっては恣意的意味も同一ではない。例えば、日本語の「青い」と英語の blue は恣意的な側面も同一でない場合が多々ある。日本語で「青葉」と呼ばれるものが、英語では *blue leaf と言わず、green leaf と呼ばれるのは、最もよく知られる語の恣意性の不一致である¹⁷⁾。

この傾向は複合語でも顕著に観察される。複合語はある統語構造を名詞句に具現化したものであるため、そこから「統語的な有契性」が発生し、恣意的側面は薄れる。プロトタイプ命題論では、こうした有契性も必然的に有標性を持つとする立場をとる。従っ

て、線状的に長い発話ないしは冗長的な発話は従来の研究と同様に有標的であるとみなされる。

以上の議論を図式化すると、以下のようなになる。



角形全体はある命題の意味を表す。中心にある黒い角形はプロトタイプ命題の中でも完全に恣意的な要素であり、2番目の外枠は本稿で言及したプロトタイプ命題である。その中には有契的な要素や場面ごとの理想的な $+a$ が含まれることもある。3番目の外枠は、プロトタイプ命題から派生された命題のデフォルトの意味である。最後の外枠の角形は、コノテーションや場面ごとの状況、話者の知識や心理的背景によって付加されるパロールの意味である。それぞれの角形の大きさは便宜的なものであり、場面や選択された命題によって変化する。

3.4. 文の分析

図に基づいて以下の例文を検討する。

(28) Fortunately I heard that police arrested the furious murder.

(28) のデフォルトのプロトタイプ命題は (29)、全体の意味構造は (30) である。

(29) [ϕ] [POL [ϕ [POLICE ARREST FURIOUS MURDER]]]

(30) [FORTUNATELY] [IT WAS THE CASE] [POS [I HEAR]] [IT WAS THE CASE] [POS [ϕ [POLICE ARREST FURIOUS MURDER]]]

このうち、(29) は図の 2 番目の外枠にあたる。文のプロトタイプ命題で純粹に恣意的なものは、その性質において有契の統語的意味の介在を許している以上、存在しえない。これは、ある文や命題的名詞句、複合語などは構成性の原理を破り、ゲシュタルト的意味が付加されるということも同時に意味する。(30) のうち、命題の真理値を変えない “[IT WAS THE CASE] [POS [I HEAR]] [IT WAS THE CASE] [POS [ϕ ” までは 3 番目の外枠の中にある（どこまでが恣意的かを分析することは、文においては極めて困難である）。[FORTUNATELY] は、3 番目の外枠内と 4 番目の外枠にまたがる可能性がある。何故なら、モダリティはその性質上、話者の心的態度として明示されるか (D-MOD)、命題の意味 (S-MOD) と分析されるかが曖昧だからである。

最後の外枠の角形は、(28) が発話された状況、聞き手又は話者が感じた個人的な心理状況や特定の場面によって付加される意味を表す。これは、明示されていなくとも (28) の発話をした際には何がしかの関心や心理（例えば安心感や虚脱感、達成感など）を話者が持つはずであり、その解釈は個人によって様々だからである。

3.5. 語の分析

語を命題として分析する際、形態が一つで構成されている語と、

統語的要因が関係する派生語、複合語といった二つ以上の形態で構成されている語を区別する必要がある。

3.5.1. 形態が一つで構成されている語

例として dog を挙げる。/dog/ と 〈dog〉の意味的結びつきは恣意的であり、黒塗りで示された中心の角形が〈dog〉となる。一方、2番目及び3番目の外枠に属する意味は限りなく少ない。外の角形に対応するコノテーションの意味は、〈可愛い〉、〈吠える〉、〈ペット〉あるいは犬に対して何らかの不快な印象がある場合、〈獣〉、〈臭い〉といった否定的な意味など多岐に渡る。一方、例えば cockroach を考えると、おおよそゴキブリに対して肯定的なイメージを持つ人は少ないため、肯定的な意味での外の角形はやや狭まると予想される。逆に、否定的コノテーション（即ち、否定的な意味での外の角形）は大きくなる。普段我々になじみのない語や細分化された専門的な術語などはコノテーションが少なく、肯定的な意味においても、否定的な意味においても外側の角形は小さくなる。

3.5.2. 二つ以上の形態で構成されている語

typewriter を例にとると、type と write は別個の形としては中心の黒塗りの角形に相当する恣意的なものである。融合された typewriter は、type + write + -er と分割できるため、派生される意味は更に外側に位置する角形（3番目の角形）に入る。この点で、typewriter は type や write に比べて有契的である。なお、一番外側の角形は typewriter に付随するコノテーション、例えば〈便利である〉といった意味を担う。

総括すると、一番外側の角形は文及び語の命題に関して扱いは同等であるが、デノテーションの構造が文の命題で黒塗りの部分が非常に少なく、複合語、派生語、単一の形態素からなる語の順

に従って黒塗りの角形（即ち恣意的な意味）が大きくなり、逆に有契性を示す2番目及び3番目の外枠は小さくなる。但しこの境界線は曖昧であり、ある閾値を越えると次に移行するといった類のものではなく、あくまで連続体をなしている。

4. 結語及び問題提起

本稿の新しい試みは、語や文を一つの命題として扱い、それを図式しうる意味構造を立てたこと、そしてその境界線は連続した放射状のもので、二項対立的なものではないことを示したことである。この程度問題は、有標性に限らず、恣意性に関しても当てはまる。つまり、ある語（ないしは文）が恣意的であるかどうかは程度問題であり、相補分布的なものではない。仮に一つの形態素で示された語であっても完全に恣意的というわけではなく、逆に有契的な語や文も幾分かの恣意性を持ちうる。

本稿の中核とも呼べるコンテクストの意味づけは、既に Bloomfield (1933) でも Situation という語を用いて部分的に説明されており、また、Deese (1965) も Associative Meaning という術語を用いてそれに近い立場を主張している。しかし、本稿ではそのどちらも核心とはとらえず、話者の心的態度に意味を見出そうとした点において、先の研究とは異なる。

本稿で示した議論の問題点は、あまりにコンテクスト依存の言語理論であり、コンテクストの定義自体を問題にしなければならないことである。話者の心的態度や状況のみがコンテクストとは限らず、その他の要因も考慮に入れる必要がある。また、統語構造から生み出された意味が必ずしも有契的であると断言してよい根拠はない。コンテクストの定義を確立させ、ただそこに放り込むだけの進化論的アプローチから脱却すること、そして、統語構造並びに音韻構造のリンケージを明確にすることが、今後の研究課題となる。

【注】

- 1) 一部の学者は言語の恣意性はソシユール独自の発案ではないと指摘するが、本稿の議論に直接の影響はない。詳しくは Bakhtine (1929) 他を参照。
- 2) 意味の場 (Semantic Field) の観点から言語の否定的差異について述べた研究として Ullmann (1962) を参照。
- 3) 話し手と聞き手の情報のコンセンサスやコードの共有については Jakobson (1963) や神尾 (1990) が詳しい。
- 4) (1) は「犬」を認知主体 (Conceptualizer)、「犬の鳴き声」を参照点 (Reference Point)、「犬そのもの」をターゲット (Target) として、犬の鳴き声を表す言語表現によって〈犬〉を表記した例である。更に言及するならば、上記の wow-wow の成立過程は無意識で行われる既に文彩を失った表現であり、転化表現 (カタフレーズ) と呼ぶことができる。参照点による言語分析はメタファーやメトニミーと深くかかわる興味ある議題である。
- 5) オノマトペは (個別言語間に形態的類似性が見られるものの) 言語毎に差異がある一方、単一言語内にその差異はない。例えばフランス語話者には「犬の鳴き声は ouah である」という認識があり、それをプロトタイプとみなす。鶏の鳴き声などもフランス語では cocorico、スペイン語では quiquiriqui、英語では cock-a-doodle-doo、日本語ではコケコッコというように、プロトタイプは各言語で決まっている。特に英語の場合、文頭に cock (雄鶏) が来ているところなどは、意味の点から見ても示唆的である。
- 6) 定延は「グリコ森永事件」のように、語句の意味面と音韻面の区分境界が一致しない現象を「文節ミスマッチ」と呼んで分析している。
- 7) 「意味的な有契性」は強制された文彩と見ることもできる。つまり、新しく生じた意味伝達の必要性のために、ある音に対応する意味に拡張ないし逸脱が起こるケースである。例えば、/ashi/ という音は〈人間の足〉という恣意的繋がりから意味の拡張が起こり、〈机の脚〉という意味と (その形状の類似性から有契的に) 結びつく場合である。強制された文彩の意味拡張は「意味的な有契性」の一つの法則であるが、他の有契性と独立して存在しているわけではない。一方、メタファーやメトニミーは自由な文彩であり、類似性又は近似性が保持されている限りは意味と音の結びつきは自由であり、反語同士を結びつける反語結合説も認められる。
- 8) なお、逸脱及び非文から生じる意味の有標性については Yaguello (1981)

や上述の文献を参照。

- 9) 近年では主に認知言語学者がゲシュタルト心理学派による「全体は部分の総和以上のものである」とする主張を取り入れることにより、更に含意の研究が盛んになっている。詳しくは Sperber & Wilson (1986) の関連性の議論などを参照。
- 10) 本稿ではモダリティの概念を「話し手の発話時点における心的態度」と定義する。そして、命題内容が客観的磁場を形作るのに対し、モダリティは主観的磁場を形作る。つまり、命題内容は現実の現象そのものを表記するのに対して、モダリティは話者の主観的側面を重視する。
- 11) 中右は談話モダリティと命題モダリティの差を的確に分析した点で示唆に富むが、術語については採用することができない。中右は、話者の心的態度を発話態度及び談話モダリティ (Discourse Modality)、命題に対する態度を命題態度及び文内モダリティ (Sentence Modality) と呼んでいるが、そもそも談話とは文の集合体を表すものであるため「心的モダリティ (Mental Modality)」とでも名づけた方がいいように思われる。なお「発話態度」という用語に問題はない。発話 (Utterance) は文でも単語単位でも行われるからである。
これに対して「文内モダリティ」という術語も問題がある。通常、文とは命題とモダリティの組み合わせであり、中右が主張するのはそのうちの命題に対する態度だけだからである。従って、「命題モダリティ (Propositional Modality)」とでも名づけた方がよい。なお、命題態度という術語に問題はない。
- 12) この曖昧性は、(11) の I believe が主体化されているか否かにも起因する。主体化は語のみならず、節や文単位でも生じることがある。具体的議論は Langacker (1987, 1991) を参照。
- 13) 中右に先立つ概念として、Austin (1962) の行為遂行的発話及び Benveniste (1966) の話者主体の議論を参照。
- 14) 発話された瞬間に応じてプロトタイプが変化するという説明理論は、Hopper (1998) が Emergent Grammar という道具立てで既に言及している。しかし、本稿は Hopper のそれとは異なり、文脈や話者の心的態度によってプロトタイプが変化しうること、統語構造のみならず、後述する語彙構造にも適応可能な点が異なる。
- 15) 語や名詞句と文の間には多くの類似関係があることは既に指摘されているが、一般的に命題的名詞句 (e.g. his departure from Japan) との比較が多い。歴史的に見るとプロトタイプは語レベル、特に前置詞などの機能語の研究から発展した概念であるが、機能語などは付加され

るコノテーションが少なく直示的な意味が強いため、プロトタイプの的な性質を命題的名詞句より多く持つと言える。

- 16) 例えば「苔」という語は肯定的、moss は否定的コノテーションが付加される傾向にある。
- 17) 各言語間の辞書的意味の不一致は、特定の場面にのみ限定される性質のものではない。例えば英語の identity の辞書的意味は(日本語では)「同一性」となるが、「同一性」と identity が恣意的レベルで同じ意味を持っているとは考えにくい。

【参考文献】

- Austin, J. L. (1962) *How to Do Things with Words*. Oxford University Press.
- Bakhtine, M. (1929) *Le Marxisme et la philosophie du langage*. Gallimard.
- Benveniste, E. (1966) *Bulletin de la société de linguistique de Paris: problèmes de linguistique générale*. Gallimard.
- Berlin, B and P. Kay. (1969) *Basic Color Terms: Their Universality and Evolution*. University of California Press.
- Bloomfield, L. (1933) *Language*. Holt.
- 千野栄一 (1980) 『言語学のたのしみ』大修館書店.
- Chomsky, N. (1957) *Syntactic Structures*. Mouton de Gruyter.
- Chomsky, N. (1986) *Knowledge of Language: Its Nature, Origin and Use*. Praeger.
- Culler, J. (1976) *Saussure*. Fontana Press.
- Deese, J. (1965) *The Structure of Associations in Language and Thought*. The Johns Hopkins Press.
- Grice, H. P. (1975) "Logic and Conversation". In Cole & J. L. Morgan (eds.) *Syntax and Semantics. Vol. 3. Speech Acts*. Academic Press.
- Hjelmslev, L. (1953) *Prolegomena to a Theory of Language*. University of Wisconsin Press.
- Hopper, P. J. (1998) "Emergent Grammar". In M. Tomasello (ed.) (1998) *The New Psychology of Language*. LEA.
- Horn, L. (1988) "Morphology, Pragmatics and the Un-verb". *ESCOL*. New Heaven.
- Horn, L. (1989) *A Natural History of Negation*. University of Chicago Press.

-
- Horn, L. (1992) "The Said and Unsaid". *SALT*. New Heaven.
- Horn, L. (2000) "From if to iff: Condition Perfection as Pragmatic Strengthening". *Journal of Pragmatics*. New Heaven.
- Jackendoff, R. (1990) *Semantic Structures*. MIT Press.
- Jackendoff, R. (1997) *The Architecture of the Language Faculty*. MIT Press.
- Jakobson, R. (1963) *Essais de linguistique générale*. Paris.
- Jakobson, R. (1976) *Six leçons sur le son et le sens*. Paris.
- Kajita, M. (1968) *A Generative-Transformational Study of Semi-Auxiliaries in Present-Day American English*. Sanseido.
- 神尾昭雄 (1990) 『情報のなわ張り理論』大修館書店.
- Kristeva, J. (1969) *Le Langage, cet inconnu*. Mouton de Gruyter.
- Lakoff, G. (1987) *Women, Fire and Dangerous Things*. University of Chicago Press.
- Langacker, R. W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar 1: Theoretical Prerequisites*. Stanford University Press.
- Langacker, R.W. (1991) *Foundation of Cognitive Grammar 2: Descriptive Application*. Stanford University Press.
- Mounin, G. (1968) *Saussure*. Seghers.
- 太田朗 (1980) 『否定の意味: 意味論序説』大修館書店.
- Rosch, E. (1975) "Cognitive Representations of Semantic Categories". *Journal of Experimental Psychology*.
- 定延利之 (2000) 『認知言語論』大修館書店.
- Sapir, E. (1921) *Language: An Introduction to the Study of Speech*. Harcourt, Brace Jovanovich.
- 佐藤信夫 (1978) 『レトリック感覚』講談社.
- Saussure, F. (1916) *Cours de linguistique générale*. Payot.
- Sperber, D & Wilson, D. (1986) *Relevance: Communication and Cognition*. Blackwell.
- Stein, G. (1976) *Poésie et grammaire*. Change.
- 田林洋一 (2003) 「瞬間プロトタイプ命題理論」 *Sophia Linguistica*, 51. 39-60. 上智大学.
- Tabayashi, Y. (2003) *Aplicación de la semántica jerárquica y la teoría de prototipo en la preposición EN-Con especial atención a la polaridad de EN*. Tesis de Máster. Universida de Sofía.
- Ullmann, S. (1962) *Semantics: An Introduction to the Science of Meaning*.

Oxford University Press.

中右実 (1994) 『認知意味論の原理』 大修館書店.

Yaguello, M. (1981) *Alice au Pays du Langage*. Seuil.